

本講義資料のご利用にあたって

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。

著作権が東京大学の教員等に帰属する著作物については、非営利かつ教育的な目的に限り再利用することができます。

ご利用にあたっては、以下のクレジットを明記してください。

クレジット:

UTokyo Online Education 学術フロンティア講義 2022 石井剛



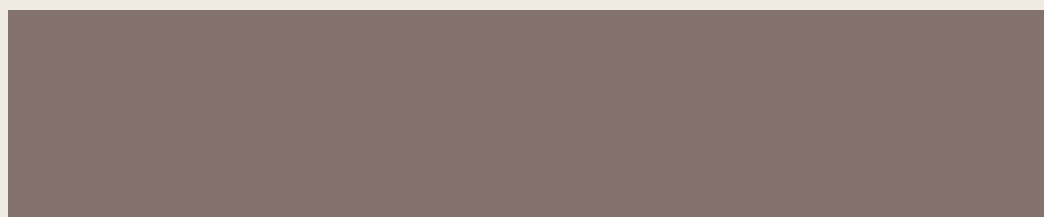
2022年4月8日

石井剛（総合文化研究科）

30年後の世界へ——「共生」を問う

東アジア藝文書院2022年度学術フロンティア講義

第1回 ガイダンス



EAA

EAST ASIAN ACADEMY
FOR NEW LIBERAL ARTS

ガイダンス

東アジア藝文書 院とは何か？

- 北京大学とのジョイントプログラム
- 「東アジアからの新しいリベラル
アーツ」
- 教養学部後期課程「東アジア教養
学」プログラム
- 新しい産学連携による「価値」の
創造



東京大学東アジア藝文書院編

私たちはどのような世界を想像すべきか

トランスビュー、2021年

災害、疫病、環境、科学技術、宗教……

不確実な時代において、

30年後の未来を考えるために

〈世界〉と〈人間〉を
学問の最前線から
捉え直す11講

脳科学／被災地・香港／



ガイドンス

「30年後の世界 へ」とは？

* 駒場寮跡地（コミプラ中庭）

「30年後の世界」は具体的に今日から30年後の世界のことを指しているわけではありません。受講者のみなさんが社会の各領域で中心的な役割を担っているであろう未来のことを象徴的に表すものです。そこに至るまでの道のりは、みなさん一人一人が自分で、そして他の誰かと手を取り合って歩いて行くものです。未来はしたがって、みなさんの外側からやってくるものではなく、みなさんがわたしたちと共に創りあげていくものなのです。「30年後の世界へ」とはつまり、みなさんが自身の未来を想像するための手がかりとなる言語を探す旅の始まりを劃すわたしたちからの呼び声にほかなりません。教養とは持てる知識の量的な豊かさではなく、未来を創りだすために必要な言語を不断に鍛え続けるプロセスのことを指すと、わたしたちは考えます。



ガイドンス

「共生」とは？

*キャンパスの梅林に棲息するワカ
ケホンセイインコ（2020年2月）

日本における「共生」概念とその周辺

- 浄土宗「ともいき」 椎尾弁匡→黒川紀章
- 有島武郎「共生農団」
- 倉田百三『共に生きる倫理』（大東出版社、1941年）
- 井上達夫『共生の作法』
- UTCP（共生のための国際哲学教育研究センター）
- 宮本久雄「相生」
- 中島隆博「共死」
- 中島隆博／田辺明生「共生成 co-becoming」

黒川紀章 「共生の思想」

「共生の思想」は、四十年ほど前から研究し始めたが、その淵源は大正十二年にまで遡る。この年に、近代仏教界の代表的な推進者である椎尾弁匡師（浄土宗大本山増上寺八十二世）が、「ともいき仏教会」という新しい仏教運動を始められたのである。

椎尾師はまた、浄土宗系の東海学園の学園長も務められ、私はその東海学園で中高時代を過ごし、師のご講話を直接聞法する機会に恵まれた。その折に、「仏教というのはどんな人間にも、動物や植物にも仏が宿っているということを教え、殺生をするなとも教えている。にもかかわらず、精進料理であるといっても野菜を食べるではないか。これは矛盾ではないか」という質問をしたことを覚えている。

このとき、椎尾師は「必要最小限にいただくことはかまわないのである。人間が死んだあとは灰になって大地を富ませ植物を生かし、その植物がまた動物を生かすというように循環が成立していれば、これは生かし生かされ、共に生きている関係となってよいのである」と教えられた。

小林康夫（UTCP前センター長）

ここで明らかになっている「事態」は、ごく単純に、われわれはすでに、否応なく、「共生」的なひとつの生態系のなかに存在している、ということです。われわれはすでに――たとえば二酸化炭素という物質の水準においてだけにしても――すでに「共生」しているのです。「人類」として「共生」し、かつ「人類」として他の生物種たちと「共生」しているのです。しかも、われわれは、未来においてやって来るすべての「人類」と他の種と、すでに「共生」しているのです。

これは形而上学的な、神秘的な「真理」というよりは、凡庸で散文的な「事実」です。だが、われわれの内在性はこの「事実」にまだ追いついていない。われわれはまだみずから「人類＝存在」として「実在」していない。「人類」はまだ「唯名」とどまっている。とすれば、われわれはおそらく、いま、内在性の誘惑を超えて、ということはひょっとすると「哲学」の誘惑を振り切ってすら、「人類」として「実在」しようとしなければならないのかもしれないかもしれません。すなわち、「新しい人」が生まれることを、いま、われわれは想像しなければならないのかもしれないかもしれません。

――小林康夫「新しい人」に向かって：人類の共生の地平」『共生の哲学のために』東京大学共生のための国際哲学研究センター（UTCP）、2009年、p.20-21

https://utcp.c.u-tokyo.ac.jp/publications/pdf/UTCPBooklet_13_011-021.pdf

宮本久雄 「相生」

花や人などは種としては反復生成するにしても、個体としてはやはり唯一回性的である。ところがこの唯一回性的でかけがえのない生は、他者と絆をもち、各々がその生命を分かち合い、他者の生命と関わらないでは成り立たない。家族の中に生き、あるいは生命連鎖の中に生きる。人は、ノをはゝが支える形であるとも、人間はじんかんと読むともいわれる。人間到る処に青山あり、である。だから人間が自閉する孤立とは、例えばギリシャ神話におけるナルキッソスが陥った自己陶醉であれ、絶対的権力者の他者排斥であれ、そのままではやがて死滅に到る。この他者の拒みを悪と呼ぼう。こうして人間に限れば、かけがえのなさで交わり（相生）、唯一回性と関係性との矛盾的間（あわい）を生きるように招かれているといえる。

—宮本久雄『パウロの神秘論：他者との相生の地平をひらく』

東京大学出版会、2019年、p.2

宮本久雄 「相生」 （つづき）

一般的学知の探究法は「それはなんであるか」との問いを中心に、ものごとを「何であるか」（何性、whatness）の束として定義付け、さらに理論化法則化して学的システムを形成し、展開する。これに対して、「物語り」（narrative）は「誰であるか」を常に中心として物語りを続け、そこにこの人は誰々であるという風な仕方でも物語り的人格・同一性（narrative identity）を形成する働きをなす。こうした物語りは小さく貧しい人々の他者性を一層尊重し、その人々の自己の自覚と自律を形成して相生の契機になりえよう。あるいは歴史に埋没しつつあるアイヌや沖縄、シンガポールやマレーシアの日本統治時代の暴虐、水俣や暴力にさらされている女性たち、朝鮮の東学党運動、カタリ派など、それらに関する物語りを探査・発掘し、他者の物語り群の地平を拓くことも重要である。なぜならそれらの小さき物語りには、抑圧された人々の恨（ハーン）や恨晴らし（ハン）の願い、和解と相生のエネルギーが秘められ、小さき人々を抑圧して生きてきた「大きな物語」の突破口・転換の機になりうるからだ。

—宮本久雄『パウロの神秘論：他者との相生の地平をひらく』p.459

中島隆博 「共生共死」を超えるために

その極点に、沖縄戦での「軍官民共生共死」がある。それは軍国主義に自らの生死を共に捧げるような共生共死である。法然の共に極楽に往生しようという思いと比べると、真逆のものではないだろうか。

二〇世紀の生命やいのちという概念は実に強力である。「大切ないのち」「親から子へ繋がれるいのち」といった言い方は、わたしたちの無意識にまで染み通っているからだ。

〔中略〕

もしわたしたちがこうした二〇世紀的な生命や生から逃れられないとすれば、共生もまた、生命や生の共同体的な増進に向かうほかない。二〇二〇年のCOVID-19が示したのは、まさにこうした共生の方向であった。生命や生のためであれば、うちとそとを峻別し、安全安心なうちに立てこもる。それがStay Homeである。

しかし、それは特定の生のための共生かもしれない。つまり、その目的のためであれば、別のあり方をしているものは死んでもやむをえないという可能性を含んでいるということだ。共生共死と似たようなものがここには影を落としている。

田辺明生 「共生成」

人間とは何かということを〈あいだ〉や〈つながり〉のなかの潜在的可能性という観点から定義するとどうなるか。私はこれを“human co-becoming”という言葉で考えたいと思います。

地球において人間は進化してきたわけですが、そもそもそれは人間だけの個別の進化としてとらえることはできません。地球における生命体、そして非生命体のすべては共進化し、共生成してきたのです。一つの種が進化すれば、それに伴って環境のほうにも影響を与え、必然的に他の生命・非生命にもそれが及びます。そのことによって、他の生命・非生命もまた進化していく。逆の言い方をすれば、環境が変化し、他種が進化したからこそ、その種も進化したのです。つまり、すべての生命・非生命は共に変化する。共に生成していくしかないのです。共進化という考え方は、優れた種が残っていくというような競争的な進化観——これは生物学的にも誤った進化論理解なのですが——とはまったく異なるもので、たいへん魅力的です。

こうした相互的なつながりのなかでそれぞれが変化していくことを「共生成（co-becoming）」といいます。人間も共生成する全体のなかの一部なのです。

——「「人新世」時代の人間を問う——滅びゆく世界で生きるということ」

東京大学東アジア藝文書院編『私たちはどのような世界を想像すべきか』、トランスビュー、2021年、

-
- Symbiosis
 - Associated Living
 - Conviviality
 - Co-existence
 - Holobiont

イヴァン・イリイチ「コンヴィヴィアリティ」

産業主義的な生産性の正反対を明示するのに、私は自立共生（コンヴィヴィアリティ）という用語を選ぶ。私はその言葉に、各人のあいだの自立的で創造的な交わりと、各人の環境との同様の交わりを意味させ、またこの言葉に、他人と人工的環境によって強いられた需要への各人の条件反射づけられた反応とは対照的な意味をもたせようと思う。私は自立共生とは、人間的な相互依存のうちに実現された個的自由であり、またそのようなものとして固有の倫理的価値をなすものであると考える。私の信じるところでは、いかなる社会においても、自立共生（コンヴィヴィアリティ）が一定の水準以下に落ちこむにつれて、産業主義的な生産性はどんなに増大したとしても、自身が社会成員間に生みだす欲求を有効に満たすことができなくなる。

—イヴァン・イリイチ『コンヴィヴィアリティのための道具』 渡辺京二・渡辺梨佐 訳、ちくま学芸文庫、2015年、p.39-40

イリイチ 「節度ある楽しみ」

英語ではコンヴィヴィアルという言葉は、今では宴会気分という意味と同じになっているのを私は知らないではない。それはオックスフォード英語辞典（OED）の指示する意味とは異なっており、現代スペイン語の「節制ある楽しみ（エウトラペリア）」のまじめな意味あいとは対立している。そのまじめな意味こそ私の意図するものなのだ。

—イヴァン・イリイチ 『コンヴィヴィアリティのための道具』 p.18

自立共生的な社会の学校教育

自立共生的な社会では、強制的で終わりのない学校教育は、公正のために除去されねばならないだろう。生涯の特権を求めて終りなき階梯を昇りつめるといふ、特定年齢ごとの強制的な競争は、平等性を増大させることはできず、より早くスタートしたもの、より健康なもの、教室外でよりよく知識を装備されたものに有利に働くにちがいない。そういう競争は必然的に社会を、失敗者から成る多くの層に階層化する。

—イヴァン・イリイチ『コンヴィヴィアリティのための道具』 p.100

Convivialist Manifesto (2013)

<https://www.gcr21.org/publications/gcr/global-dialogues/convivialist-manifesto-a-declaration-of-interdependence>

- Centre for Global Cooperation Research
- By convivialism we mean a mode of living together (*con-vivere*) that values human relationships and cooperation and enables us to challenge one another without resorting to mutual slaughter and in a way that ensures consideration for others and for nature. We talk of challenging one another because groups and individuals would be not just delusory but disastrous. Conflict is a necessary and natural part of every society, [.....] because every human being aspires to have their uniqueness recognized and this results in an element of rivalry as powerful and primordial as the aspiration, also common to all, to harmony and cooperation. [.....] In short, we have to make conflict a force for life rather than a force for death. And we have to turn rivalry into a means of cooperation, a weapon with which to ward off violence and the destruction.

Convivialist Manifesto A declaration of interdependence, Center for Global Cooperation Research, 2014, p.25 https://www.gcr21.org/fileadmin/website/daten/pdf/Publications/Convivialist_Manifesto_2198-0403-GD-3.pdf

The Second Convivialist Manifesto (2020)

- **Principle of common naturality:** Humans do not live outside a nature, of which they should become “masters and possessors.” Like all living beings, they are part of it and are interdependent with it. They have a responsibility to take care of it. If they do not respect it, it is their ethical and physical survival that is at risk.
- **Principle of common humanity:** Beyond differences of skin, nationality, language, culture, religion, or wealth, sex, or gender, there exists only one humanity, which must be respected in the person of each of its members.
- **Principle of common sociality:** Human beings are social beings for whom the greatest wealth is the richness of the concrete relationships they maintain among themselves within associations, societies, or communities of varying size and nature.
- **Principle of legitimate individuation:** In accordance with these first three principles, legitimate is the policy that allows each individual to develop their individuality to the fullest by developing his or her capacities, power to be and act, without harming that of others, with a view toward equal freedom. Unlike individualism, where the individual cares only for oneself, thus leading to the struggle of all against all, the principle of legitimate individuation recognizes only the value of individuals who affirm their singularity in respect for their interdependence with others and with nature.
- **Principle of creative opposition:** Because everyone is called upon to express their singular individuality, it is normal for humans to be in opposition with each other. But it is only legitimate for them to do so as long as this does not endanger the framework of common humanity, common sociality, and common naturality that makes rivalry fertile and not destructive. Politics inspired by convivialism is therefore politics that allows human beings to differentiate themselves by engaging in peaceful and deliberative rivalry for the common good. The same is true of ethics.

--THE SECOND CONVIVIALIST MANIFESTO: Towards a Post-Neoliberal World, Civic Sociology, 2020 <https://online.ucpress.edu/cs/article/1/1/12721/112920/THE-SECOND-CONVIVIALIST-MANIFESTO-Towards-a-Post>



ガイダンス

授業の進め方

* 旧特設高等科校舎（101号館）

-
- オムニバス講義
 - 前期課程主題科目「学術フロンティア講義」
 - 後期課程教養学部「高度教養特殊講義（東アジア教養学）」
 - ダイキン工業株式会社社員との共同受講
 - UTokyo OCWによる配信
 - 書籍『私たちはどのような世界を想像すべきか』（トランスビュー、2021年）
 - Google Formsによるリアクションペーパー提出



第2講（4月15日）

青山和佳

東洋文化研究所、東南アジア研究

共生をめぐる小さな自伝的物語り



E A A

東アジア藝文書院

EAST ASIAN ACADEMY FOR NEW LIBERAL ARTS



第3講（4月22日）

星野太

総合文化研究科、美学・表象文化
論

いかにして共に生きるか
——「食べること」と「リズム」について



E A A

東アジア藝文書院

EAST ASIAN ACADEMY FOR NEW LIBERAL ARTS



第4講 (5月6日)

呂植 (Lü Zhi)

北京大学、生物保護学

Living in Harmony with Nature:
Is It Possible And How?



E A A

東アジア藝文書院

EAST ASIAN ACADEMY FOR NEW LIBERAL ARTS



第5講 (5月20日)

ユク・ホイ (Yuk Hui)

香港城市大学、技術哲学

Beyond the Organismic Metaphor,
or Philosophy after Cybernetics



E A A

東アジア藝文書院

EAST ASIAN ACADEMY FOR NEW LIBERAL ARTS



第6講 (5月27日)

中島隆博

東洋文化研究所、世界哲学・中国
哲学

共生とバイオポリティクス



E A A

東アジア藝文書院

EAST ASIAN ACADEMY FOR NEW LIBERAL ARTS



第7講 (5月30日)

田中有紀

東洋文化研究所、中国哲学

類を違える物と共に生きる世界：
中国思想から考える環境倫理



E A A

東アジア藝文書院

EAST ASIAN ACADEMY FOR NEW LIBERAL ARTS



第8講 (6月3日)

藤岡俊博

総合文化研究科、フランス哲学・
ヨーロッパ思想史

「他者」と共生する「私」とは誰か
——レヴィナスの思想を手がかりに



E A A

東アジア藝文書院

EAST ASIAN ACADEMY FOR NEW LIBERAL ARTS



第9講 (6月10日)

柳幹康

東洋文化研究所、中国仏教思想史

仏教から見た共生：
私ひとりで幸せになれるのか？



E A A

東アジア藝文書院

EAST ASIAN ACADEMY FOR NEW LIBERAL ARTS



第10講（6月17日）

張政遠

総合文化研究科、日本哲学・現象学

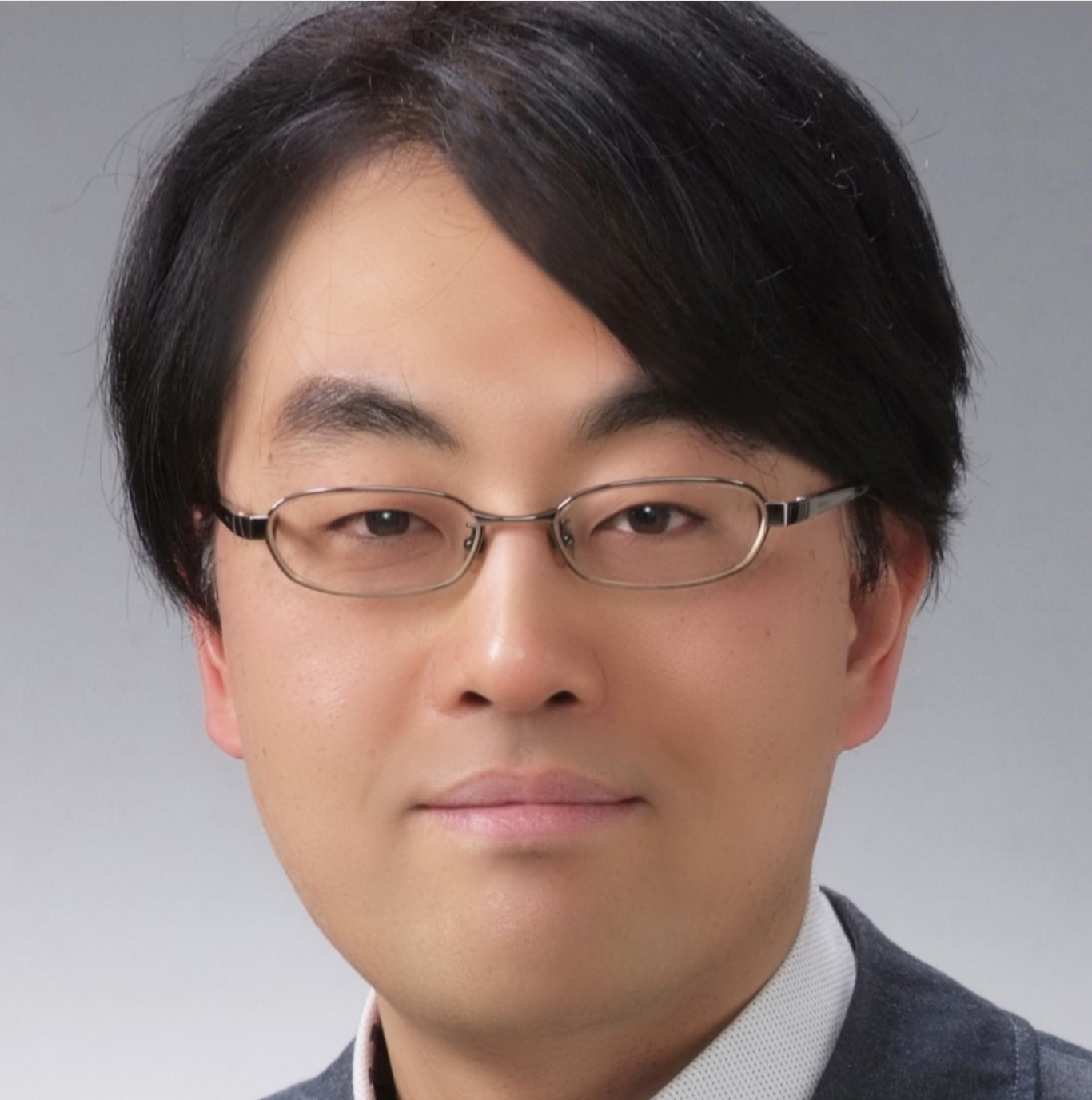
先住民族との共生



E A A

東アジア藝文書院

EAST ASIAN ACADEMY FOR NEW LIBERAL ARTS



第11講（6月24日）

村上克尚

総合文化研究科、日本戦後文学

文学研究と「ポストクリティーク」
——批判は共生のための技術になり得
ないのか？



E A A

東アジア藝文書院

EAST ASIAN ACADEMY FOR NEW LIBERAL ARTS



第12講 (7月1日)

王欽

総合文化研究科、比較文学・批評
理論

共生を求めること・共生を堪えること
——魯迅を再読する



E A A

東アジア藝文書院

EAST ASIAN ACADEMY FOR NEW LIBERAL ARTS



第13講 (7月8日)

石井剛

総合文化研究科、中国哲学

よりよく生きるためのスペースを想像する



E A A

東アジア藝文書院

EAST ASIAN ACADEMY FOR NEW LIBERAL ARTS

参考文献

- 石井剛 《文的縫隙、混沌之边从共生的难题到“宇宙的希望”》, 《睿ⁿ》, vol.1, 近刊
 - 川本隆史 『共生から』、岩波書店、2008年
 - 黒川紀章 『新・共生の思想』、徳間書店、1996年
 - 小林康夫 「「新しい人」に向かって：人類の共生の地平」、『共生の哲学のために』、東京大学共生のための国際哲学教育研究センター（UTCP）、2009年
 - イヴァン・イリイチ 『コンヴィヴィアリティのための道具』、渡辺京二・渡辺梨佐訳、ちくま学芸文庫、2015年
 - 中島隆博 「わたしたちの共生――パーソナルなものをめぐって」、『世界思想』 2021年春号
 - Convivialist Manifesto: A Declaration of Interdependence, Centre for Global Cooperation Research,
 - 宮本久雄 『パウロの神秘論』、東京大学出版会、2019年
 - 東京大学東アジア藝文書院編 『私たちはどのような世界を想像すべきか』、トランスビュー、2021年
 - 宋冰编著 《走出人类世》, 中信出版集团, 2021年
 - *THE SECOND CONVIVIALIST MANIFESTO: Towards a Post-Neoliberal World*, <https://online.ucpress.edu/cs/article/1/1/12721/112920/THE-SECOND-CONVIVIALIST-MANIFESTO-Towards-a-Post>
-